

2017 年 アメリカ学会第 51 回年次大会（早稲田大大会）プログラム

（アメリカ学会ウェブサイトにて大会参加登録をお願いいたします）

1. 開催日 2017 年 6 月 3 日（土）、6 月 4 日（日）
2. 会場 早稲田大学 早稲田キャンパス
〒169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104
交通アクセス・キャンパスマップ <https://www.waseda.jp/top/access/waseda-campus>
会場校連絡先 麻生享志 （電話：03-5286-1768 Email：asoes@waseda.jp）
3. 受付 11 号館 4 階第 1 会議室
4. プログラム （詳細は大会会場で配布する【大会要項・報告要旨】をご覧ください）

第 1 日 2017 年 6 月 3 日（土） June 3, 2017

午前の部：自由論題 9：15～11：45

【自由論題 A 視覚と演劇空間】

司会：塚田幸光（関西学院大学） 討論：常山菜穂子（慶應義塾大学）

青木深（東京女子大学）「戦後日本における米軍慰問演芸とその系譜——ヴァラエティ・ショーの比較文化史 1850 年代から 1950 年代まで」

深津勇仁（慶應義塾大学・院）「米国西部劇の変遷——伝統主義から修正主義の系譜の中で」

菊川雅子（同志社大学・講）「国吉康雄の『黒い日の丸』——意味の多重性と隠ぺい」

武田寿恵（明治大学・院）「『牛ナベ的モダニズム』の正体——『モルガンお雪』にみる秦豊吉のアメリカ」

【自由論題 B 帝国としてのアメリカ】

司会：中野博文（北九州市立大学） 討論：平体由美（札幌学院大学）

遠藤寛文（東京大学・院）「バトンルージュの革命政府と『帝国化』する共和国——マディソン大統領の西フロリダ領併合宣言をめぐる一考察」

Ai HISANO 久野愛 (Harvard Business School)

“Visualization of Taste: Mass Marketing, Regulation, and the Co-Creation of Color in the American Food Industry at the Turn of the Twentieth Century”

Jeannie N. SHINOZUKA (University of Washington)

“Biotic Exchanges Across the Pacific: Agricultural Empire Building in the US and Japan, 1920-1930”

【自由論題 C 移動のポリティクス】

司会：馬曉華（大阪教育大学） 討論：佐々木一恵（法政大学）

Julie NOOTBAAR (Oita Prefectural College of Arts and Culture 大分県立芸術文化短期大学)

“Charles A. Longfellow in Meiji Japan: An Examination into the Background Circumstances and Significance of the Travels of H.W. Longfellow’s Son to Late 19th Century Japan”

Greg ROBINSON (University of Quebec, Montreal)

“Chinese American and Japanese American Women in Louisiana: History Unveiled”

Zhenxing ZHU 朱振興 (Doshisha University 同志社大学・院)

“Pilgrimage for Revolutionary Spirit: African American Activists, the PRC, and Chinese American Leftists in the Cold War-Civil Rights Era”

【自由論題 D 知識人のアジア認識】

司会：佐々木卓也（立教大学） 討論：川口悠子（法政大学）

池上大祐（琉球大学）「アメリカ知識人のグアム認識に関する一考察——1945～50 年における民族問題研究所(IEA)の活動を中心に」

繁沢敦子（神戸市外国語大学）「爆風兵器か、火災兵器か？米戦略爆撃調査団と原爆の威力をめぐる言説の形成」

高田とも子（九州大学・院）「狂気の時代の核批評——ルイス・マンフォードのヒロシマ・ナガサキ批評に関する考察」

昼食休憩 11:45～12:45

理事会・評議員会 11:50～12:45

午後の部 大隈講堂

清水博賞授賞式 1:00～1:10

シンポジウム「反エスタブリッシュメントの系譜」 1:15～3:45

司会：宇沢美子（慶應義塾大学） 討論：宇野重規（東京大学）

報告：会田弘継（青山学院大学）「反エスタブリッシュメントとしての右派」

南 修平（弘前大学）「『反エスタブリッシュメント』が立ち現れる時——ジョン・V・リンジーとニューヨーク労働者の対立」

巽 孝之（慶應義塾大学）「パラノイド文学の国境」

JAAS-ASAK Roundtable: The Theater and the Theatrical: Reconsidering American “Drama” in the Age of Trump 3:55～5:55

Welcome Remarks: Fumiaki KUBO 久保文明 (President, JAAS/University of Tokyo)

Chair: Tadashi UCHINO 内野儀 (JAAS/University of Tokyo 東京大学)

Speakers:

Sookhee CHO (President, ASAK/Chung-Ang University)

Takashi ASO 麻生享志 (JAAS/Waseda University 早稲田大学)

Toshihiro NAKAYAMA 中山俊宏 (JAAS/Keio University 慶應義塾大学)

Etsuko TAKETANI 竹谷悦子 (JAAS/University of Tsukuba 筑波大学)

懇親会 6:15～8:15 大隈ガーデンハウス 2 階

第 2 日 6 月 4 日(日)

部会・Workshop 午前の部 9:30～12:00

【部会 A 「アーカイヴ」再考——表現者たちにとっての保存と展示】

司会：波戸岡景太（明治大学）

報告：石原剛（早稲田大学）「マーク・トウェイン研究とアーカイヴ」

落合明子（同志社大学）『『アフリカ系というレンズ越しに』アメリカをみる——NMAAHC
設立の意義と課題』

和田光弘（名古屋大学）「史料論とアーカイヴ」

討論：倉石信乃（明治大学）

【部会 B アメリカ型福祉国家再考】

司会・討論：西山隆行（成蹊大学）

報告：土屋和代（東京大学）「誰のための『福祉』か——ニクソン政権下の『家族支援計画』と人
種・階級・ジェンダー」

根岸毅宏（國學院大学）「アメリカにおける公的福祉と NPO」

吉田健三（青山学院大学）「アメリカ型福祉国家における公的年金と民間年金」

討論 大辻千恵子（都留文科大学）

【部会 C 女性と政治権力】

司会：高尾直知（中央大学）

報告：野口啓子（津田塾大学）「ドメスティックな女性たちの政治力——ハリエット・ビーチャー・
ストーの『アンクル・トムの小屋』を中心に」

佐藤円（大妻女子大学）「アメリカ先住民社会における女性と権力——過去と現在」

豊田真穂（早稲田大学）「現代アメリカ社会におけるリプロダクティブ・ライツ——ナディア・スル
マン事件を考える」

討論：栗原涼子（東海大学）、大津留（北川）智恵子（関西大学）

【Workshop A Framing the “American Century”: Movements for Social Justice I】

Chair: Hisae ORUI 大類久恵 (JAAS/Tsuda University 津田塾大学)

Speakers:

Eric TANG (ASA/University of Texas at Austin)

“Fire! The Long Hot Summer of 1967 Revisited”

Fumiko SAKASHITA 坂下史子 (JAAS/Ritsumeikan University 立命館大学)

“From Anti-Lynching Struggles to the Black Lives Matter Movement: The Politics of Looking and Respectability Reexamined”

Toru UMEZAKI 梅崎透 (JAAS/Ferris University フェリス女子大学)

“The Anti-War Movement of the Sixties Reconsidered: A Transatlantic Perspective”

Discussant: Ken CHUJO 中條献 (JAAS/J. F. Oberlin University 桜美林大学)

昼食休憩 12:00～1:30

分科会 12:10～1:25 (内容については下記「分科会のご案内」をご参照ください)

総会 1:30～2:00

部会・Workshops 午後の部 2:10～4:40

【部会 D ヒップホップにみる人種の混淆】

司会：新田啓子（立教大学）

報告：金澤智（高崎商科大学）「ヒップホップ・ムスリム——ポスト 9/11、ポスト・オバマ時代の人種と信仰」

川村亜樹（愛知大学）「ポスト人種主義とヒップホップ」

大和田俊之（慶應義塾大学）「ヒップホップとアフロ＝アジア」

討論：藤永康政（日本女子大学）

【部会 E 環大西洋世界の思想・宗教・歴史】

司会・討論：石川敬史（東京理科大学）

報告：増井志津代（上智大学）「第一次大覚醒と環大西洋福音主義文化の醸成——ピューリタン、敬虔派の交流を中心に」

森 丈夫（福岡大学）「北米植民地の海外派兵から見る大西洋世界の軍事的位相——ジェンキンの耳戦争におけるカルタヘナ遠征（1740-42 年）を中心に」

田中きく代（関西学院大学）「大西洋海域における海のリテラシー——黒人解放の祝祭を中心に」

討論：井上弘貴（神戸大学）

【Workshop B: Framing the “American Century”: Movements for Social Justice II】

Chair: Ikue KINA 喜納育江 (JAAS/ University of the Ryukyus 琉球大学)

Speakers:

Rebecca WANZO (ASA/Washington University in St. Louis)

“An Untimely People and Untimely Place: The Space-Time(s) of Ferguson”

EunHyoung KIM (ASAK/Konkuk University)

“Thoreau’s Civil Disobedience in Modern Democracy”

Naoko ONO 小野直子 (JAAS/University of Toyama 富山大学)

“Sterilization and Social Justice in Public Welfare”

Discussant: Yoshiaki FURUI 古井義昭 (Aoyama Gakuin University 青山学院大学)

【Workshop C: JAAS-OAH Panel: Workings of State Power at America’s Margins】

Chair: Satoshi NAKANO 中野聡 (JAAS/Hitotsubashi University 一橋大学)

Speakers:

Greg DVORAK (Hitotsubashi University 一橋大学)

“Re-invading ‘the Martial Islands’: American Militarism and Marshall Islander Resistance”

Jana LIPMAN (OAH/Tulane University)

“Debating Refugee Status: The Presence of the State Outside U.S. Borders”

Lisa MCGIRR (OAH/Harvard University)

“The Long War on Drugs and the Making of the American Carceral State”

Discussant: Takakazu YAMAGISHI 山岸敬和 (JAAS/Nanzan University 南山大学)

5. 注意事項

- 1) 大会参加登録は、当学会ウェブサイトの大会参加ページ上で5月7日までをお願いいたします。
学会ウェブサイトの「第51回年次大会参加登録のお願い」ページをご覧ください。
- 2) 懇親会の参加には事前の申し込みが必要です。大会参加登録ページでお申し込みのうえ、懇親会費4,700円を5月12日までにご納入ください。(払い込まれた懇親会費はいかなる事情があってもお返しできませんので、ご注意ください。) 当日参加については会費5,000円を予定しておりますが、人数に限りがございます。必ず参加をご希望の場合は事前の払い込みをお勧めいたします。
- 3) 年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。
- 4) 第51回年次大会では、早稲田大学国際コミュニケーション研究科との共催のため、非会員の大会参加費の徴収はいたしません。但し、参加にあたっては会場受付でご登録をお願いいたします。
- 5) 昼食：6月3日(土)は、大学食堂をご利用いただけます。また、キャンパスの内外にコンビニエンス・ストア、レストラン・カフェ等があります。なお、会員休憩室を除き、学内(大隈講堂・各教室)でのご飲食は学則により禁止されております。ご不便をおかけしますが、

ご協力ください。

- 6) 開催校の都合により、本ニューズレターの発行時点では一部を除き会場の詳細が決定しておりません。決定し次第学会ウェブサイトでご案内しますので、ご注意ください。
- 7) 第 51 回年次大会では、第 1 日（6 月 3 日）の理事会・評議員会について弁当の注文は受け付けませんので、ご了承ください。
- 8) 会場までの交通アクセスは、早稲田大学ウェブサイト（<<https://www.waseda.jp/top/access/waseda-campus>>）をご覧ください。宿泊や交通手段の確保も各自でお願いいたします。

第 51 回年次大会 分科会のご案内 6 月 4 日（日）12:10～13:25

1. 「アメリカ政治」 責任者：菅原和行（釧路公立大学）kazusuga7@hotmail.com

報告 1：石神 圭子（日本学術振興会（東京大学））「コミュニティを組織する——テキサスにおける生活賃金運動（Living Wage Campaign）の成功とその含意」

報告 2：奥広 啓太（ニューヨーク州立大学オルバニー校・院）「アメリカ安全保障国家の『起源』：真珠湾攻撃以前の政軍関係の検討」

報告 3：平松 彩子「深南部州民主化定着過程におけるニクソン南部戦略の限界」

本年度のアメリカ政治分科会は、3名の会員より、アメリカ政治の各分野における最新の研究成果を報告いただく。石神会員は、アメリカにおけるコミュニティ・オーガナイズングの一環として近年成果をあげている生活賃金運動に焦点を当て、おもにテキサスにおける運動の成功を事例として考察し、その政治的含意を示す。奥広会員は、陸軍省主導で提出された私有財産収用法案を例に、真珠湾攻撃以前に政軍関係が——冷戦期を予見するような形で——変化を見せていたことを明らかにする。平松会員は、大統領政治補佐官および州政党幹部の残した史料をもとに、州知事公認候補指名過程および都市部黒人票の取り込みをめぐるニクソン政権が行った深南部三州への政治的介入について、公民権法成立後の同地域における民主体制の定着という観点から考察する。

2. 「アメリカ国際関係史研究」 責任者：森 聡（法政大学）smori@hosei.ac.jp

報告：手賀裕輔（二松学舎大学）「ニクソン政権の南ベトナム政策、1969～1975 年」

本報告では、1969 年から 1975 年にかけてのニクソン政権の南ベトナム政策について考察する。従来、ニクソン政権はベトナム戦争の泥沼化に伴い、いかにして南ベトナムから速やかに撤退し、それまでの関与を清算するかを追求したとされてきた。しかし、近年公開された一次史料によれば、こうした見方には再検討が必要である。

ニクソン政権は南ベトナムに対して自立と抑制を同時に追求する政策を展開していた。すなわち一方で、米国は、ベトナム駐留米軍の段階的撤退と南ベトナム政府・軍の強化を進めるベトナム化政策を展開し、南ベトナムの自立を促進した。他方で、米国は和平後の関与を約束して安心を供与することに加えて、軍事・経済援助を行うことで、南ベトナムの管理、制御を試みたのである。

しかしながら、ニクソン政権の政策は失敗に終わり、和平成立から 2 年後の 1975 年には、南ベトナムは北ベトナムの攻勢により崩壊する。本報告では米国の政策が失敗に終わった原因を明らかにしたい。

3. 「日米関係」 責任者：末次俊之（専修大学・講） suetoshi007@gmail.com

テーマ：「太平洋世界における日系漁民と日米関係」

報告：今野裕子（上智大学）

「海」から見る日米関係とはどのようなものであろうか。トランプ政権下で「テロリスト」の脅威を排除しようとするアメリカだが、第二次世界大戦前にも太平洋から迫る危険に警鐘を鳴らす扇動的な言説が流布した。本報告では、人口 3,000 人強の和歌山県太地町からの漁業移民と、彼らを取り巻いたカリフォルニア州の排日運動に焦点を絞り、移民の出身村や渡航先のローカルな文脈が、連邦レベルの政治や二国間関係に与えた影響について考察する。日米関係を考える上で地政学的に太平洋の重要性は見逃せないが、海を生業の場とする日系漁民は特にアメリカの国防に対するわかりやすい脅威として、排日論者の標的とされた。人種主義が国防論とリンクする過程を詳らかにすると同時に、「アメリカ」が日本の小さな漁村にとってどのような意義を持っていたのかも明らかにし、日米関係研究の地平を広げる可能性を提示したい。

4. 「経済・経済史」 責任者：名和洋人（名城大学） nawa@meijo-u.ac.jp

テーマ：「アメリカ型福祉国家：医療保険規制と政府間財政関係と NPO」

報告者：中浜 隆（小樽商科大学）、加藤美穂子（香川大学）、木下武徳（立教大学）

根岸毅宏（國學院大学）の司会により、以下 3 報告をふまえ議論する。第 1 報告：中浜隆「アメリカの医療保険規制の分権性（アメリカの医療保険規制は分権的であり、オバマ政権（連邦政府）の医療保険改革は医療保険規制における州政府の主導性という枠組みを損なうものではないことを提示する）」。第 2 報告：加藤美穂子「アメリカの分権的政府間関係：連邦道路補助金を事例として（アメリカの連邦政府と州・地方政府の政策過程と連邦補助金の枠組みを実証的に分析するために、本来的に州・地方政府の役割とされてきた道路政策に焦点を当て、その分権構造とそれを支える論理を明らかにする）」。第 3 報告：木下武徳「アメリカ型福祉国家における NPO・社会的企業の位置（本報告では、主に UCLA のハセンフェルド（Hasenfeld）教授の分析を参照しながら、これまで NPO が福祉国家の構築に貢献してきたが、それが連邦・州政府の権限移譲や民間化の政策によって逆に後退要因ともなっていることを明らかにする）」。

5. 「アジア系アメリカ研究」 責任者：野崎京子（京都産業大学・名） nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp

テーマ：「アジア系カナダ人作家が描く異文化折衝の考察」

報告：村上裕美（関西外国語大学）

2017 年 1 月にアメリカ第 45 代大統領として就任した Donald Trump が 7 国の国民の入国を禁止する動きが見られる一方で、カナダ首相 Justin James Trudeau は、カナダは移民により成り立つ国として移民を歓迎している。そのカナダにおいてアジア系移民の 2 世として活躍する作家の作品には、日々の生活で感じているが正体を掴めない、あるいは言葉に表せない二国間の文化や思想の違いの中で生き抜く二世の姿が描かれている。Gerry Shikatani, Hiromi Goto, Madeleine Thien の作

品に見え隠れするアジア系移民のカナダ社会における適合と疎外に立ち向かう姿を考察する。

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」 責任者：山内恵（清泉女子大学・講） ymucm@sannet.ne.jp

報告：阿部 碧（一橋大学・院）「母は炎となって——アリス・ハーズの焼身から読みとく国際女性運動」

本報告は、1965年3月にミシガン州デトロイトにてヴェトナム反戦の意を込めて焼身したアリス・ハーズと日米越間の国際女性運動について「母」という記号から考察するものである。アリス・ハーズの焼身は報道写真が存在しておらず、彼女の焼身という死は絵などの表象で記号化されていった。不死鳥(Phoenix)や人間たいまつ(Human Torch)として記号化されていく過程において、「女性の焼身」という女性性を感じさせるものではない記号を付与されてきたが、深尾須磨子やファン・スアン・ハットらの詩人によって「母」という記号が加えられた。加えて彼女の死後に、日本で設立されたアリス・ハーズ夫人記念平和基金の支援先は平和教育団体ならびに被ばくした女性と子供たちと明記されている。この「母」という記号を手掛かりに、苦痛からの回復というテーマをもってアリス・ハーズの焼身と国際女性運動の「母」たちが感じていた苦痛の連関を考えたいと思う。

7. 「アメリカ先住民研究」 責任者：佐藤円（大妻女子大学）mdsato@otsuma.ac.jp

テーマ：「日本でアメリカ先住民を語ること——その課題と展望」（意見交換会）

2006年に本分科会が発足した際にその中心となられた阿部珠理先生を編者に、本分科会参加者の多くが執筆者となって『アメリカ先住民を知るための62章』（明石書店）が昨年刊行された。日本の一般読者にアメリカ先住民の現状を可能な限り多角的に説明しようと試みた『62章』は、本分科会の10年にわたる歴史の成果である。そこで本年は、編者の阿部先生をまじえながら、『62章』の執筆の際に感じた現在の日本でアメリカ先住民について書く、あるいは語ることの難しさや課題について、執筆者ならびにその他の分科会参加者の間で討論を行ってみたいと考えている。具体的なテーマとしては、「連邦政府との関係」「ステレオタイプ」「保留地の現状」などを予定している。今後の日本におけるアメリカ先住民研究のあり方について考える機会になることを期待しているため、アメリカ先住民に関心のある方々の積極的な参加と発言をお待ちしている。

8. 「初期アメリカ」 責任者：石川敬史（東京理科大学）takafumi@rs.kagu.tus.ac.jp

テーマ：「初期アメリカ南部における宗教と政治」

報告：矢島宏紀（成城大学・講）

アメリカ合衆国における政治・社会と宗教との深い結びつきの原点として捉えられるためか、初期アメリカにおける政教関係の研究には膨大な蓄積がある。ところが、日本における研究対象はニューイングランドや中部植民地に偏ってきた。しかし例えば、合衆国憲法修正第1条やその後に影響を与えたとされるジェファソン起草のヴァージニア信教自由法は、ヴァージニアにおける公定教会とその政治・社会への影響を念頭に書かれたものである。そこで本分科会では、これまであまり注目されてこなかった南部（本報告ではヴァージニア中心）に着目し、植民地期南部の公定教会とその政治・社会との関係、また、建国期における信教の自由および政教分離に関する研究動向を紹介しながら、その意義について検討したい。

9. 「文化・芸術史」 責任者：小林剛（関西大学） go@kansai-u.ac.jp

テーマ：「クリスチャン文化産業とオルト・ライト」

報告者：小森真樹（テンプル大学）

2017年1月に発足したトランプ政権の首席戦略官・上級顧問にスティーブ・バノンが任命された。バノンが牽引してきたウェブ雑誌ブライトバートは、政権発足以後次々に表立ってきたフェイクニュースの主たる発信源となったメディアであり、伝統的な右派——即ち、人工妊娠中絶やゲイ RIGHTS に反対し、聖書中心のモラルと「家族の価値」を重視する立場——とは異なる新たな右派勢力、いわゆるオルト・ライト（alt-/alternative right）の推進力になっていると言われる。本分科会では、こうした人物が現政権の中核となったことに代表される保守主義の構造変化について考えてみたい。一つの切り口として、大衆文化における宗教、特にキリスト教の扱いを分析素材とする。従来、クリスチャンは政治的保守派にとって重要な票田であったが、現在の政治・社会状況においてはいかなる位置を占めているのだろうか。発表では、まず1980年代以降に焦点を当てて伝統的な保守派とクリスチャン文化産業の展開を確認しつつ、それにつなげる形で、近年台頭する新たな右派において宗教がどのように表象され、消費されているのかを考察したい。

10. 「アメリカ社会と人種」 責任者：武井寛（岐阜聖徳学園大学） h.takei@gifu.shotoku.ac.jp

テーマ：『黒い太平洋』における人種の形成—占領下の日本・沖縄に駐留したアフリカ系アメリカ人を中心に—

報告者：岡田泰弘（名古屋外国語大学）

アフリカ系アメリカ人の歴史と文化に関する研究領域では、「アフリカ離散」（African Diaspora）や「黒い大西洋」（Black Atlantic）などの概念を用いて国民アイデンティティを相対化する試みや、人種概念の社会的構築や人種差別主義・制度の成立、展開、解体をめぐる比較研究など、トランスナショナルな、あるいは一国史の枠組みを超えた理論・実証研究が比較的早い時期から進められてきた。また、近年では大西洋世界を超えて、太平洋世界におけるアフリカ系とアジア系の人々の関係をめぐる実態と表象に焦点を当てた研究の蓄積が進み、「黒い太平洋」（Black Pacific）という概念が提唱されている。本報告では私がこれまで取り組んできた占領下の日本と沖縄におけるアフリカ系アメリカ人の主体・アイデンティティ形成に関する研究の紹介を中心に、国際的な文脈における「人種」の構築について分析するための理論的枠組みとしての「黒い太平洋」の可能性と問題点について検討する。